

今回は、86歳になる父親(要介護2)と同居している盛岡市在住の男性(54歳独身)のご相談です。

質問

父が去年の8月に極度の貧血で意識を失い緊急搬送され、それをきっかけに漁師をしていた青森から盛岡の実家に戻りました。母は4年前に癌で亡くなりました。父は脚が不自由になりクルマ椅子を使って生活していますが、食欲もあり、とても元気です(歳のせいかな最近物忘れはげしくなったような気がしていますが)。近くにいる姉がほとんど毎日のように父の世話をするために来てくれています。カラオケが大好きな父のために家のそばにあるスナックによく連れていくのですが、顔なじみの人から声をかけられると、とても嬉しそうにしています。やさしい父ですが、一つだけ困っていることがあります。週に3回ヘルパーさんをお願いしているのですが、父が時々ヘルパーさんの胸やおしりを触ったり、不必要に抱きついたりするというのです。ヘルパーさんの事務所からはこのようなこと

在宅医療は健幸医療

長尾 和宏

医療法人社団裕和会・理事長
長尾クリニック・院長



が続くようであれば派遣を打ち切ると言われました。以前父から「風俗店に連れて行ってくれ」と頼まれたことがあったのですが、この話を聞いた姉が「いい歳をして、恥ずかしい」と憤慨して話し合いにもならなかったこともあり、これ以上姉と父親の関係が気まずくならないようにと考え、このことは姉には話していません。正直なところ、男として父親の気持ちもわかるのですが、父親の面倒を見てくれている姉や親切にしてくださっているヘルパーさんのことを考えると、今後どうしたらよいか悩んでしまいます。変なご相談で申し訳ありませんが、先生のご意見、アドバイスをお聞かせ願えませんでしょうか。よろしくお願いたします。

お答えします

決して変な相談ではありませんよ。きわめて大切な課題だと思っております。

足が不自由で要介護2のお父様は、脳梗塞を患われたのでしょうか。もし脳梗塞後であれば、高次脳機能障害のような脳の抑制系になにか障害が生じている可能性があります。悩まれている場合もあります。お父様の行動は決して悪気は無いので、真摯に相談に乗ってくださると思います。

さて、風俗に連れていくかどうかです。結論から言うなら、息子さんが試しに連れていくことは「アリ」だと思います。私の経験でもそんなことがありました。高齢者に限らず、若い障害者を親が風俗に連れていった例もありました。さすがに母親だと、かなり複雑な心境になりますが。ただ一度行っただけで本人は満足して「もういい」と言われたそうです。しかし性病をうつされてそれでまた悩む、という例もありました。

性欲は年齢も男女も問いません。お父様の場合は、それは精神的な欲求だけなのか、肉体的なものもあるのか、そして男性機能は大丈夫なのか。日本においては高齢男性や障害者の性は、従来、見て見ぬふりをする傾向がありました。しかし欧米諸国ではオーブンに議論されています。性的欲求に対応するボランティアやプロ(?)もいると聞きます。

日本においても、性の問題はもはや決してタブーではなくなってきました。在宅医

口から食べて異性に胸がトキメキているのは生きています 証拠で素晴らしいことです

ります。あるいは脳梗塞が無いのであれば脳の前頭葉の機能が低下する病態である前頭側頭型変性症の可能性もあります。臨床現場では性的欲求が強すぎる人に、極少量の抗精神病薬を内服して頂くことがあります。ただそれだけで副作用なく完全解決する場合もあります。いずれにせよ、介護や看護をしていく女性の胸やお尻を触る男性は決して珍しくありません。

一方、介護スタッフへのセクハラが大きな社会問題になっています。胸やお尻を触られたり、卑猥な言葉を投げかけられた経験がある女性介護スタッフは大勢います。病院に勤務している看護師さんも同様な経験がある人が多いそうです。実は私でさえ、高齢女性から性的なお誘いを受けたことが

あります。この世は男と女しかいません。いくつになっても、どんな状態になっても異性への興味はあるわけで、その延長線上にそのような行動があるのだと思います。

さて、具体的な対応法についてです。行動があまりにも激しかったり、女性の介護スタッフが断るような場合は男性スタッフにチェンジすることはよくあります。あるいは、おおらかに上手に対処してくれる女性スタッフが一部存在するのも事実です。ギリギリでかわす術を知っているベテラン職員です。だからまずは、実際に関わっておられる女性スタッフに詳しい事情を聞き、対処法と一緒に相談してみてもどうでしょうか。案外、スタッフはあまり気にしていない場合もあります。反対にスタッフ

セックスボランティア

著者：河合香織
出版社：新潮社

「性」とは生きる根本——。それはたとえ障害者であっても同じことだ。脳性麻痺の男性を風俗店に連れていく介助者がいる。障害者専門のデリヘルで働く女の子がいる。知的障害者にセックスを教える講師がいる。時に無視され、時に大げさに美化されてきた性の介助について、その最前線で取材を重ねるうちに、見えてきたものとは——。タブーに大胆に切り込んだ、衝撃のルポルタージュ。

私は障害者向けのデリヘル嬢

著者：大森みゆき
出版社：ブックマン社

風俗の経験6ヵ月、介護の経験ゼロの女の子が出会った障害者の性の現実を、彼女自身がリアルな言葉ですべてを綴ったノンフィクション。車椅子のお客様、寝たきりのお客様、意思疎通のできないお客様、目の不自由なお客様……。障害は人によって違う。悩みも人によって違う。私はそれぞれに見合った性的サービスができているだろうか？少しでも役に立ちたい、もう知らないふりはできないから…これを読めば、世の中が違って見えてくる。

セックスと障害者

著者：坂爪真吾
出版社：イースト・プレス

障害のある人たちは、どのように自分や他人の性と向き合っているのだろうか。それらの喜びや悩みは、障害の無い人たちと同じものなのか、それとも違うものなのか。一般社団法人ホワイトハンズを立ち上げ、障害者の性の支援に長年携わってきた著者が、「純粋な天使」や「かわいそうな性的弱者」という画一的なイメージを取り払った上で、障害者の性の現状を8つのエピソードから解説。そこから、障害にかかわらず自尊心の基盤であり社会参加の原動力でもある、人間にとっての本来の性のあり方が浮かび上がってくる。

置き去りにされてきた高齢者・障害者の性について考えてみませんか。

療関係の研究会や学会でもこの話題が出るようになり、様々な情報がオープンになりつつあります。また何冊か関連書籍も出ていたので、もし余裕があれば読んでみてはいかがでしょう。『セックスボランティア』（河合香織氏）、『私は障害者向けのデリヘル嬢』（大森ゆかり氏）、『セックスと障害者』（坂爪真吾氏）、などです。

高齢者の性は週刊誌のメインテーマでもありません。私は生食であるとともに、生性であるとも思います。口から食べて異性に胸がドキメイているのは生きている証拠で素晴らしいことです。しかしパワハラと認識されることも多々あります。だからケースバイケースで上手に対応するしかないと思います。

お父様のケアマネさんが定期的にケア会議を招集しているはず。その時にできればこの問題も話し合ってください。患者や家族・医師らが人生の終末期における治療方針などを繰り返し話し合うACP（アドバンス・ケア・プランニング）のニツクネームが人生会議と決まりました。しかし何か話しあえばいいのかわからない、という声も聞きます。私は「困っていることならなんでも」と説明しています。人生会議に一番適しているのがケア会議という場です。お父様の場合、性の問題がケア会議のメインテーマかもしれません。是非、恥ずかしがらずにみんなで話し合ってみてはどうでしょうか。みんなで話し合っていて、決めていくことがポイントです。人生会議とは延命処置だけではありません。時には「性」も大きな命題になります。いくら興奮気味といっても上手に接すれば本人の希望を聞き出すことは可能はず。もし機会があればみんなが席で「お父さん、風俗に行ってみる？」と明るい雰囲気聞いてみてください。

きらめき

プラス

Vol.77 夏秋合併

志ある者、事竟に成る

菅原智美

パラアスリート応援フェスタ2019

永野秀樹